

- ・ 氏名：三間美知太郎
- ・ 所属：
(3月まで) 東北大学国際文化研究科
(4月以降) 大阪大学言語文化研究科

- ・ 題目

カントリー・ミュージックにおける白人性構築
--大恐慌期アメリカ中西部における人種と音楽--

- ・ 研究概要

修士論文においては、まず、文化的レベルの人種問題が現在のアメリカ合衆国における課題であることを指摘した。そうした問題の解決策として、文化が人種によって規定されるあり方の解明を挙げた。そうしたあり方を解明するため、修士論文では、大恐慌期の中西部におけるカントリー・ミュージック（以下、カントリー）を取り上げた。なぜなら、こうした音楽が、「白人の音楽」として規定されてしまった文化であると考えられるからである。中西部のカントリーの起源は、南部の民謡で、それはもともと人種性のないものだった。しかしながら、南部民謡は白人性を構築されることで、「白人の音楽」としてのカントリーへと人種化されていった。修士論文では、こうした中西部におけるカントリーが「白人の音楽」へと人種化される経緯を追うことで、文化が人種によって規定されるあり方を明らかにしようとした。

修士論文の第一章では、まず、起源となった南部民謡、そして南部カントリーに人種性がなかったことを指摘した。それでは、なぜ南部において人種性のある音楽は生まれなかったのだろうか。その要因を、白人性を用いながら考察した結果、ジム・クロー法の存在が、人種性のある音楽の不在を可能にしていたことが明らかになった。こうした考察結果を踏まえて、ジム・クロー法のような白人性を体現する制度の存在しない中西部において、「白人の音楽」としてのカントリーが成立したと仮定した。

第二章では、そうした仮説に踏まえて、中西部に注目した。もし、中西部において「白人の音楽」としてのカントリーが成立したと仮定するならば、そのリスナーとなった中西部白人農民もその人種化に関わったと考えられる。よって、第二章においては、中西部白人農民に注目し、白人性概念を用いながら、彼らの人種観を考察した。考察の結果、中西部白人農民の人種観とは、「アメリカ生まれの白人が真正なアメリカ人である」であったことが明らかになった。

第三章では、いよいよ中西部におけるカントリーに注目した。1920年代から南部民謡は、カントリーとして売り出されることとなった。カントリーのラジ

オ番組は、より利潤を生み出すために、ターゲット層となる中西部白人農民の価値観を、売り出す音楽に反映させようとした。よって、第二章で明らかになったような「アメリカ生まれの白人が真正なアメリカ人である」という白人性も、南部民謡に反映されることとなった。第三章では、本来人種性を備えていなかった南部民謡が、白人性を構築されることによって、いかなる音楽に変貌し、その後カントリーとして発展していったのかを考察した。考察の結果、南部民謡は「アメリカ開拓者」という白人の音楽として人種化されたことが明らかになった。1930年代以降も、形を変えながら、カントリーは白人性を体現する「白人の音楽」としてあり続けた。

このように、修士論文では、中西部カントリーの人種化という事例を取り上げ、その人種化の過程を考察した。その考察によって明らかになったのは、文化が人種によって規定されるあり方である。中西部カントリーは、リスナーとなる中西部白人農民の白人性を反映する形で、音楽関連産業によって、南部民謡に白人性が構築され、「白人の音楽」として成立していった。こうしたことから、人種による文化の規定とは、文化の受け手の人種観を踏まえた上で、文化の作り手によって行われるといえる。

修士論文で明らかになったことは、現在のアメリカにおける文化的レベルの人種問題に示唆を与えるものと思われる。なぜなら、文化的レベルの人種問題の議論においては、文化の作り手にのみ、しばしばその責任が追及されてきたからである。しかしながら、人種による文化の規定は必ずしも文化の作り手によって一方的に行われるものではなく、むしろ文化の受け手の人種観に基づいた形で行われる。文化レベルの人種問題が大きな課題となる現代においては、文化の作り手のみならず、文化を受容する側の人種観をも問い直す必要があるといえるのである。